

あゆみ通信

VOL. 151

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康



縁起

大江憲成

(日豊教区観定寺、九州大谷短期大学名誉学長)



大江憲成師

日頃、縁起という言葉をよく耳にします。「あっ、お茶碗に茶柱が立っている。縁起がいいなあ」「まあ、あなた縁起かつぐのですね」私たちは吉凶禍福の前兆にふれて縁起が良いとか悪いとか申します。「袖振り合うも多生の縁」ふと袖が触れ合っただけの二人の出会い…、それはいくどとなく生を重ねし果ての深い縁。

「このお寺の縁起は室町時代にさかのぼります」などはお寺の由来や歴史を意味します。このように縁起という言葉は歴史的にもいろいろな意味合いで使われてまいりました。

ここで本来の意味に立ち帰ってみましょう。(中略)つまり、縁起とは、物事が様々な事柄、はたらきを「縁」として共に関係し合いながら「起」っている事実を意味します。

たとえば、芽が出る時、芽は種を因として出ると考えますが、実は水や太陽の光などを縁としなくては芽は出ません。またそこには実は光や水にとどまらず、限りなく織りなす背景があります。

あらゆる物事は単独で存在しているのではないのです。関係し合いながら変化し合いながら成立している相補的な関係体なのです。

釈尊はこの縁起に目覚めた方で「縁起を見るものは法を見る」と語っておられます。縁起とはすべての衆生が目覚めなくてはならない大切な法(道理)であるのご説法くださっ

ているのです。

ところが私たちは日頃、その道理を無視して、自分と周りとの関係を切り離して、自分を実体視し固定的に受け止めています。ずっと自分のことばかりを考えているのがそのしるしです。(中略)

神や運命、差別や排除等もその考え方に基づいているのです。

しかし縁起は、すべては関係としてあるという事実を語る道理ですので、その道理が知られる時、実体的な考えは根拠なきものとなります。

そこではいかなる独断もエゴイズムも虚無主義も成り立ちません。人生は決められないし、決め込む必要もありません。定義づけられないし、定義づける必要もありません。人生は人間の勝手な解釈にはまるものではなく、本来私たちの思いを超えて限りなく広く深く、そして豊かなのです。

私たちはまことにちっぽけな存在であります。はからずも、皆平等に、大なる豊かな関係体として、今、ここにこうして生きているのです。(東本願寺「真宗の生活」2018年より)

第2組報恩講予告

日時 11月11日(木) 14:00

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 お勤めと法話、門徒総会

講師 山口 知丈先生

(9組 昭徳寺住職)

参加費 500円

(注) お齋は、ありません

あゆみの会総会予告

日時 12月12日(日) 13:30

会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 報告、事業計画、予算案、等、記念法話

講師 藤井善隆即應寺前住職

あゆみの会・門徒会合同研修会開催される

2021年9月2日(木) 午後1時30分から、コロナ感染拡大中ではあったが、十分感染予防対策をいただいた光照寺(墨林浩住職)を会場に、3月に開催を予定していた合同研修会が開催された。

ご講師は武宮信勝先生(天満別院輪番)で、講題は「患者になりて往生す～生きづらさを生きる力～」

先生は北海道のお寺の3男として誕生され、若い頃のつらい経験、また大谷大学で先生方や友人に出会われた話、卒業後、長崎での35年に渡るお寺での生活や、帯広別院の輪番をされたりしつつ、多くの善き師に出会われた。中でも、仲野良俊先生に出会われた時、「お前は念仏に救われたか? その問いをなくしたらお前はペテン師だ」と言われ、一晚、泣いたと。(2面へつづく)

宗祖親鸞聖人とあゆむ

今、難波別院発行の「南御堂」誌に、ご縁の澤田秀丸先生(清澤寺前住職)の「親鸞聖人のご生涯」が連載されている。

思い起こせば、2008年にあゆみの会準備会が誕生したが、右も左も分からない我々に、折から宗祖親鸞聖人750回忌法要に向けて、別院で「まんが宗祖親鸞聖人」が発行され、それを教材に、藤井善隆即應寺住職(当時)を囲んで親鸞聖人のご生涯を学んだことからスタートである。偉人伝の感覚で思っていた宗祖親鸞聖人は、あらゆるものを人間の事実として受け止め、そういう道を歩いておられた。

一緒に学んだ仲間も10数年が過ぎ、身の事情を抱えてなかなか集まれないが、大事なあゆみの始まりであったことを、感謝している。南無阿弥陀仏。(本)

どういう人に出会うかで、人生が決まってくる。仏法は私たちの心の内視鏡である。仏法にこの身を尋ねていけ！聞いた教えが開かれなかったら、自力に止まらざるを得ない。

「助けてください！」は自力である。助かってくれよという方に会うこと！愚禿という自覚が助かった内容である。そこから願生心が起こってくる。自分の思いが間に合わないと思った時、願心が我が身に成就する等、熱い思いを込めてお話しくださった。

参加者は9名であった。

(レポート：細川克彦)

如是我聞 武宮信勝先生法話聞書 細川克彦(佛足寺)



はじめに『末燈鈔』第6通より「故法然上人は『浄土宗の人は愚者になりて往生す』と候いしことを、たしかにうけたまわり候いしうえに…」と言う、

親鸞聖人最晩年の88歳の時のお手紙を引かれ、いかに法然上人のこのお言葉を大事にされていたことかと話された。また、親鸞聖人はいつの頃からか愚禿と名乗られている。愚かな身と言う自覚は凡夫の身という自覚であり、『一念多念文意』でも「凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、絶えず…」と教えられている。自分の姿を見破ってくださる鏡こそ、お経さまである。

「一生尽くしても会わなければならなかった一人の人がいる。それは私自身である」とある先生は言われた。曾我量深先生の「何とお前は愚かな者よと



曾我量深師



言い当ててくださるお方に出会うことが最高の幸せである」と言う言葉を紹介され、どうしようもない愚かな身であることを如来の本願力回向によって信知せしめられるのであって、自分の知恵才覚で知ることではないと。

休憩の後、「往生」ということについて、「往生」とは浄土に生まれ往くことである。また親鸞聖人は「念仏成仏是真宗」と言っておられる。念仏は成仏道であると。また、往生が始まるには「転換」が大事である。「助けてくれよ」という方に会うことが転換の第一歩である。自分の思いが間に合わないと知った時が廻心(轉換)である。何と愚かな自分だったという愚者の自覚こそが助かった内容である。そこから浄土に生まれたいという願生心が起こってくる。老病死という生きづらいこの世を生き抜く力は本願力回向を感知する世界から賜る。今生に於いて行き詰らない生活をどこで獲得できるか、そのために仏法に出会ってくださいと。



最後に、曾我量深先生の「如来に愛され、信じられ、敬ってくださる、そういう私に目覚めた時、私は如来を信ずることができた」という言葉を紹介され、熱のこもったご法話を終えられた。

(事務局=今回の合同研修会に、事務局が参加できず、写真・経過・要約すべて細川克彦会長にお世話になりました。ここに感謝してご報告させていただきます)

宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要

2023年3月25日(日)から4月29日(土)、真宗本廟御影堂と阿弥陀堂にて法要が開催、お勤めとご法話が行われ、全国のご門徒が参詣される予定です。

大阪教区でも、参詣計画が建てられており、詳細が決まれば、お知らせできると思います。

絶対他力の大道 清澤満之師(林晓宇先生訳)

第2章

この世の一切の出来事はすべてこれ不可思議な絶対他力のはたらきによるものであります。ところが私共はこれに馴れ切って、少しもものを尊び、事を敬うことを知りません。もし私共にもものを知り感ずる心のはたらきがないならいざ知らず、すでにももの知り感ずる心を与えられておりながら、このような有様はあまりにも大きなあやまりと言うべきではありませんか。

一つの色がうつるのも、一つの香りが匂うのも、決して色や香りそのものの起こす力によるものではありません。すべては、色や香りを起こさしめる不可思議な他力にもとづくものであります。

色や香りだけではありません。この私共自身はどうでありましょう。この世に生まれて来たのも、やがて死んでゆくのも、一つとして自分の思いによるものではありません。

ただ生まれてくる前や、死んでゆく先のことが思いのままにならないばかりでなく、現在ただいま、自分の胸に起きては消えるひと思いの心さえ、少しも自分の自由にならぬではありませんか。私共は身も心も全く他力の掌中におさめとられている身であります。

(つづく)